

## J・M・W・ターナー作《麦を運ぶ女性のいるリッチモンド・ヒル》の主題について

出羽 尚 (武蔵大学)

本発表は、イギリスの風景画家J・M・W・ターナー (1775-1851) が1819年頃に描いたとされる《麦を運ぶ女性のいるリッチモンド・ヒル》の主題について考察するものである。具体的には、人物像、及び背景に描かれたリッチモンドという街に注目して、18世紀イギリスの詩人ジェイムズ・トムソンの詩『四季』との関連を指摘したい。

この作品のサイズはターナーが展覧会によく利用したもので、当初は展覧会のために制作されたものと考えられる。しかし、実際は未完成のまま出品されることなく画家の手元に残り、彼の死後は国家に遺贈された。現在まで公に展示されたことはなく、テイトの収蔵庫に保管されたままである。先行研究がこの作品を個別に扱ったことはなく、1974年の回顧展で、構図の点からこの作品が1819年の展覧会作品の関連作だと指摘されたほかは、主題の点はもちろん、作品研究は全くなされていない。ここでは、その主題について、主に以下の二点から議論する。

第一に、作品に描かれた人物像を図像学的に分析して、作品の主題を検討する。この作品には収穫した麦の穂の束を頭上と脇に抱えて持つ女性が描かれている。麦の穂を収穫する人物像には、豊穡神ケレースや、ルツ記に登場するルツの図像の系譜がある一方で、19世紀のイギリスで意識された図像として、トムソンの『四季』に登場するラヴィーニアがある。トムソンは麦刈りに励む若く純真な女性としてラヴィーニアを描写し、麦の束を抱いたラヴィーニアの図像は18世紀後半から、『四季』の多くの版に挿絵として使われた。ターナー自身、頻繁にトムソンの詩から着想を得ており、ロイヤル・アカデミーの展覧会目録に『四季』の一節を引用した作品も多数制作している。トムソンの主題はターナーにとって展覧会作品に相応しいものであり、ラヴィーニアを連想させる収穫する人物像の表現から、ターナーがトムソンの『四季』を主題とした可能性が指摘できる。

第二に、背景として描かれたリッチモンドとその街が備えていた連想に注目する。リッチモンドはトムソンが晩年を過ごし、『四季』のなかでもその美しさが歌われたテムズ河沿いの街である。特に19世紀には国内旅行の流行により、トムソンの街としての魅力が人々をひきつけ、文学的連想を備えた街として同地は広く知られていた。ターナーもリッチモンドを主題とした複数の作品で、『四季』を引用して同地の文学的連想を利用し、作品に様々な物語を付与している。詩人と街の連想関係を理解していたターナーが、この作品でも、リッチモンドを背景に『四季』を主題としたことは自然なことだと考えられる。

以上の点から、この作品の主題としてトムソンの『四季』を意図していた可能性を議論し、ターナーの制作にとって重要なトムソンとの関係について、新知見を示したい。